

『しんぶん赤旗』に引用されたコメント

9月12日（木） 『しんぶん赤旗』に引用されたコメント

〔以下のコメントは、『しんぶん赤旗』2019年9月10日付に引用されたものです〕

日本社会覆う“韓国バッシング”
あおる政治の責任重大

政治学者の五十嵐仁さんは「嫌韓風潮は、日本の政治・社会の問題点が集中的に出てきた」と指摘します。「歴史認識では政府に問題がある。教科書で歴史を正しく教えるのではなく、教科書を書き換え人々の社会認識まで変えてきた『安倍教育改革』が隣国・韓国を蔑視する社会認識を醸成した」とします。

さきの五十嵐さんも「隣の国の政権スキャンダルを連日報じるのを見ると、なぜ自国の森・加計疑惑を熱心にやらなかったのか、口利き疑惑などを追及しないのかと思ってしまいます。むいてもむいても疑惑が出てくるのは、安倍政権の方ではないか」と皮肉ります。

8月27日（火） 『しんぶん赤旗』に引用されたコメント [コメント]

〔以下のコメントは、『しんぶん赤旗』2019年8月25日付に引用されたものです。前後の記事と共にアップさせていただきます〕

シリーズ共闘の力 政権合意「覚悟問われる」

五十嵐仁法政大学名誉教授は、かつての民主党政権と野党共闘が目指す連合政権の相違について「民主党政権は一時的な風で、上だけの政党の連携でできた。草の根で支える十分な基盤がなかった。新しい野党連立政権は、各選挙区、地方、地域で市民と野党の草の根での連携、協力、信頼が営々として築かれたその上にできる連立政権だ」と強調します。

そのうえで五十嵐氏は「重要なことは、共闘の機関車としての共産党がここに加わっていることだ。建物でいえば鉄筋コンクリート入り。共闘を追求するという点でも、市民との約束を守るという点でも、決してぶれない鉄筋です。草の根の共闘というしっかりした土台の上に、鉄筋入りの建物が立つ。民主党政権に問題があったとすれば、その教訓も踏まえて、市民と野党の共闘が発展している。民主党政権そのものとは全く違う」と語ります。

8月21日（水） 『しんぶん赤旗』に引用されたコメント [コメント]

〔以下のコメントは、『しんぶん赤旗』2019年8月16日付に引用されたものです。前後の記事と共にアップさせていただきます〕

「シリーズ 共闘の力 『信頼の発展』に結実」

『しんぶん赤旗』に引用されたコメント

「『一定の成果』という人もいるが、『一定の』は要らない。3年前と比べても大きな成果だ」——。五十嵐仁法政大名誉教授はこう述べます。

2016年の参院選挙で初めての野党共闘の時には現職候補が11人でしたが今回は30人が新人。それが連休明けになってようやくバタバタと決まっていく状況で、「簡単に言えば、野党は出遅れていた」（五十嵐氏）のです。与党側は16年の「反省」を踏まえ、大きく負け越した東北を中心に、早くから組織、業界の引き締め・締め付けを強めていました。与党側は知名度や組織体制の準備で大きくリードしていました。

五十嵐氏は言います。「選挙は用意ドンで横一線でのスタートが普通だが、今回、野党共闘側は10メートルぐらい後ろからスタートして、途中で追いつき、追い越した。野党共闘がなければ、そして共闘の中身がより前進していなければこれだけの成果をあげることはできなかった」

安倍首相は改憲勢力3分の2の維持のため、東北、新潟、滋賀などの激戦区に自らも繰り返し遊説に入るなど、権力総動員の攻勢を強めました。東北や新潟、滋賀などでの野党共闘の勝利は、その猛攻を打ち破った勝利でした。

五十嵐氏は「東北では前回に続き、今回も地殻変動が起こった。沖縄の場合は、オール沖縄の共闘のもとで何度も地殻変動が起きており、もう地形が変わっている。安倍首相も菅官房長官も、沖縄には一度も行けなかった」と述べます。

8月13日（火） 自民敗北 原動力は共闘 [論攷]

[以下のインタビュー記事は、『しんぶん赤旗日曜版』8月11日・18日合併号に掲載されたものです。]

参院選の結果をどう見るか—政治学者の五十嵐仁さん（法政大学名誉教授）にききました。

参院選の結果をマスメディア、とくに「読売」などは「与党勝利」などと報じましたが、自民党は「負けた」と私は思います。

自民党は改選前より9議席減。比例代表の得票は240万票減です。有権者全体に占める絶対得票率は16・7%。この数字は安倍晋三首相が政権に復帰した2012年以来最低の水準です。

議席を減らし、得票数を減らし、有権者比の得票率も減らした。三拍子そろっています。これを「敗北」と言わない方がどうかしていますよ。

自民党は単独過半数割れとなりました。これまでだったら新聞に「自民敗北」という見出しが出てもおかしくありません。

改憲をめざす安倍首相にとって重大なのは、改憲勢力が発議に必要な「参院の3分の2」を割り込んだことです。これまでならやれたことが、これからはできなくなったのですから。

『しんぶん赤旗』に引用されたコメント

安倍首相は参院選で、「憲法を議論する政党か、議論しない政党か」と、これまでになく改憲問題を前面に押し出して演説しました。それへの回答が「3分の2」割れです。“改憲はだめだ、”という国民の答が出たわけです。

この結果を生み出した原動力は、市民と野党の共闘です。東北を中心に定数1の10選挙区で野党統一候補が勝利しました。

3年前の参院選で野党統一候補が勝ったのは11です。その時に勝利した野党統一候補の多くは現職でした。今回はほとんどが新人。決まったのも選挙直前で、圧倒的に不利な中でたたかいて、改選2議席の5倍です。

「毎日」(7月6日付)の序盤の情勢分析では、自民優勢21、野党優勢5、接戦6です。接戦6のうち5を野党が制しましたから、終盤にかけて追い付き、追い越したことを示しています。

とくに、元大臣、元副大臣、元首相補佐官など与党のベテラン議員に競り勝った意義は大きい。この逆転があったからこそ、「3分の2」も崩れたし、自民党の9議席減も起こったのです。

今回の野党共闘の勝利を「一定の成果」としか評価しないメディアもあります。しかし、私は「画期的成果」「大勝利」といいと思います。

共通政策も前進

野党が合意した共通政策は今回、幅も数も、作成のプロセスも大きく前進しました。3年前の参院選での野党の共通政策は、政策的には安保法制の廃止だけでした。17年総選挙は7項目。

今回の共通政策は13項目で、ほぼ倍増しました。「原発ゼロ」や「米軍新基建設の中止」、「10月からの消費税増税中止」、「LGBTsへの差別解消」など国政の重要問題はほぼ入っています。しかも共通政策は市民連合のみなさんが原案をつくり野党間で協議し、合意したものです。

「本気の共闘」という点でも前回とは大きく変わりました。立憲民主党の枝野幸男代表は、共産党公認候補が野党統一候補となっている福井にも応援に入りました。

野党統一候補の得票は、32の1人区のうち29で、共闘した野党の比例票の総計を上回りました。共闘効果は実証されています。

共産党善戦、政治不満示す「れいわ」支持
希望ある未来の扉開く

日本共産党は低投票率の中、比例は1議席減らしました。しかし、足りなかったのはあと17万票ほどでもう少しです。複数選挙区では現有3議席を確保する善戦でした。

『しんぶん赤旗』に引用されたコメント

安倍政権は、消費税10%増税でも、外交問題でも行き詰っています。れいわ新選組（山本太郎代表）が比例228万票で2議席を獲得したのは、政治の現状に対して不満や批判がいかにうっ積しているかを示しています。

共産党には今後も野党共闘の推進力として頑張ってもらいたい。政策の方向性は同じですから新党の「れいわ」とも連携を強め、連立政権を実現してほしいと思います。選挙結果は総じて、希望ある未来への扉を開いたのではないのでしょうか。

7月19日（金） 自民党“地金、天皇の政治利用 [コメント]

[以下の談話は、『しんぶん赤旗』2019年7月17日付、に掲載されたものです。]

武部元幹事長「日本は天皇の国」 自民候補応援 国民主権を否定
日本共産党を攻撃

五十嵐仁法政大学名誉教授の話

また自民党の地金が出たと思います。発言の背景には、改元フィーバーや天皇代替わりなど、安倍晋三首相による天皇の政治利用があります。かつては、森喜朗元首相の「神の国」発言がありました。日本が「天皇の国」であるかのようなイメージを振りまくことで、政権基盤の安定に利用しています。“地金、ですから、今後も折に触れて出てくるでしょう。

日本は国民主権ですから、天皇の国でも神の国でもありません。その主権者である国民に支持を訴えている選挙中の発言としては最悪の内容です。

共産党は2004年に綱領を変更し、第1条を含むあらゆる条項を守って、国会の開会式に出席しています。攻撃するなら相手のことを知るべきで、この発言は自らの不勉強をさらけ出すだけです。

6月15日（土） 本当の受け皿への一歩 [コメント]

[以下の談話は、『しんぶん赤旗』6月12日付、に掲載されたものです。3面の記事「市民と野党の共闘進化」の中でのコメントも、併せてアップさせていただきます。]

安倍内閣「支持」の最大の理由は、「他の政権よりよさそう」とみられていることです。これに対抗するには、安倍政権よりよさそうだと思うことです。受け皿と認められれば一気に流れが変わる可能性があります。不満も不信も大きいのです。

野党が顔と数をそろえたというだけではだめ。共通政策ができたことは、市民と野党の共闘が本当の受け皿になるための大きな一歩です。そして市民と野党がしっかり足並みをそろえて選挙に取り組めるか、勝負はこれからです。

『しんぶん赤旗』に引用されたコメント

共産党エネルギー

法政大学の五十嵐仁名誉教授は「『共産党を除く』が当たり前の状況が、『共産党を含む』が当たり前の状況になってきている。『共産党アレルギー』より『共産党エネルギー』だ。共産党が加わることで大きな力が発揮される。政策と組織も含め、牽引力・機関車として認められるようになった」と述べます。

5月26日（日） 清潔な政治実現して [選挙]

〔以下の東京・八王子日本共産党の街頭演説での訴えは、『しんぶん赤旗』2019年5月21日付、に掲載されたものです。〕

18日に東京都八王子市で行われた日本共産党の街頭演説での五十嵐仁法政大学名誉教授の訴え（要旨）を紹介します。

安倍首相は2020年に改憲を施行すると言っています。この安倍改憲論に励まされて「戦争で領土を取り戻す」とまで言い出す議員まで現れました。まったくとんでもない状況です。

政治学者として日本の政治を長年見てきましたが、今の安倍政権は最低・最悪です。異質のあくどい政権であり、多くの問題を抱えています。「森友・加計」問題に統計不正、公文書の隠ぺい改ざん、捏造。そして忖度に次ぐ忖度。国会審議の内容や政策の中身ではなく、その前提・土台がゆがんでいます。

日本の政治に必要なのは忖度ではなく洗濯です。汚れ切った日本の政治を洗い清めることです。吉良よし子さんを国会に送って、日本の政治、安倍政治打倒に奔走してもらいましょう。きらきらと輝く清潔な政治を実現してもらおうではありませんか。

そのためには市民と野党の共闘が必要です。「だます。ごまかす、ウソをつく」が安倍三原則ですが、私たち市民にとって「忘れず、あきらめず、手を結ぶ」というのが勝利の方程式・三原則です。きたる参院選、市民と野党の共闘で希望の持てる政治を実現していこうではありませんか。

今こそ希望のある政治、その扉を共産党の躍進で切り開いていこうではありませんか。